

誰かを思い、実現する子どもを育てる
～道徳科と特別活動を両輪とした指導をもとにして～

本宮市立岩根小学校
教諭 菅野 健彦

1 実践の内容及び方法

(1) 主題設定の理由について

令和6年度の岩根小学校の教育目標は、「夢に向かって進み、共に幸せな未来を拓く」そして、目指す学校像を、「**さあ行こう！もっと『たい』『よう』輝く学校**」と掲げている。『たい』『よう』には、「誰かのために何かをし**たい**」「みんなでその夢叶え**よう**」という意味があり、そこに自立と共生の理念が込められている。本学級では、『たい』『よう』を叶えるために学級の合言葉を『**実現力**』としている。これは、4月の学級開きの際に児童と考えた学級目標である。「誰かのために」と他者の幸せを願い、一人では実現が難しいことも「みんな」と一緒であれば実現することができる。このような自己決定と自己実現が繰り返されていくことは、ひいては自分の幸せにもつながっていく。そして、児童は共同体のよさやあり方を実感し、自分達で実現できたという目には見えない社会的報酬に喜びを感じる非認知能力が大きく育っていくと考える。

本実践は令和5年度と令和6年度に担任している第5学年2組28名を対象に、**児童の2年間の成長を追い求めたものである**（令和6年度は第6学年2組）。5名の特別支援学級に在籍する児童も交流で共に学んでおり、内容に応じて道徳科や学級会に参加している。また、通常学級における特別な支援を要する児童も学級内に数名おり、個に応じた支援が欠かせない学級である。

児童の実態として、令和5年度に学級編制があり、前年度までの道徳科や学級会の指導に偏りが見られた。しかし、「誰かのために何かをしたい」という他者意識をもつ児童が多く、特に下学年や隣接する幼稚園児との交流に積極的に取り組んでいた。一方で、仲間と共に活動する姿は多く見られたものの、自己評価が厳しすぎるためか、自己有用感や学級への所属感への意識に大きな差も見られた。

上記のことを踏まえ、校内研究との関連を意識し、主題を「誰かを思い、実現する子どもを育てる」とし、副主題を「道徳科と特別活動を両輪とした指導をもとにして」と設定し、児童の自己有用感と所属意識を高め、誰かを思う道徳性の伸長と共に自主的、実践的な態度の育成を目指すこととした。

(2) 手立てと方法について

2年間の個人実践を貫く手立てを以下のように設定し、道徳科と学級会の有機的関連・往還を図ることができるようにした。なお、特別活動は多岐に渡るため、特別活動の中心的役割を担う「学級活動（1）『学級会』」を重視した。

【道徳科の授業づくり】

- ① 多面的・多角的な考えへと発展させていくために、**道徳的価値の段階に合わせたゆさぶりの発問**
- ② 日常生活やこれまでの自分の感じ方や考え方について、より想起することができるための**共通体験を入れた「自己の振り返り」の時間**

【学級会の授業づくり】

- ① **学級会コーナーの充実**
ア) 学級会の議題としてふさわしいもの（指導要領解説 P49）
イ) 議題ポスト、役割札 ウ) 次回の学級会の連絡
エ) 決定事項の掲示 オ) 考えを可視化した個人の短冊
カ) 話し合いを進めるための合言葉
- ② **児童にとって必要感のある**議題の選定と提案理由の設定
- ③ **児童の思いを言語化した**活動後の振り返り

2 実践の成果

以下は2年間の学級会の議題と、道徳科との関連である。(左は令和5年度、右は令和6年度の実践)

第1回「運動会のスローガンを達成するために、どんなことができるか考えよう」	第1回「1年間使える6年2組の旗を作ろう」
第2回「みんなが同じ目標を目指せるように、学級目標の合言葉を決めよう」	第2回「たけひこ先生の誕生日会を企画しよう」
第3回「岩根小150周年をお祝いして、5年2組でもお祝いしよう」	第3回「南達陸上大会お疲れ様会をしよう」
第4回「150周年記念のキーホルダーをデザインしよう」	第4回「学校のために自分達ができることをしよう」 +道徳科：内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」 教材名 校風をつくるのは私たち
第5回「どんなハロウィンパーティーにしたいか、めあてを考えよう」	第5回「1年生と夏祭りをしよう」 +道徳科：内容項目「親切、思いやり」 教材名 温かい行為が生まれるとき
第6回「いいねカードを作ろう」 +道徳科：内容項目「個性の伸長」 教材名 日本の「まんがの神様」	第6回「合唱部を応援しよう」
第7回「5年2組のあいさつをレベルアップさせよう」 +道徳科：内容項目「礼儀」 教材名 どちらのユニフォーム	第7回「岩根幼稚園の年長さんと交流しよう」
第8回「5年2組のあいさつをレベルアップさせよう～第2弾～」	第8回「学校の大掃除をしよう」 +道徳科：内容項目「家族愛、家庭生活の充実」 教材名 はじめてのアンカー
特別版「駅伝記録会を開こう」 +道徳科：内容項目「友情、信頼」 教材名 友のしょう像画	第9回「教育実習生の先生を迎え入れよう」
第9回「岩根幼稚園の年長さんと交流しよう」	第10回「授業参観で家族に感謝を伝えよう」 +道徳科：内容項目「感謝」 教材名 こだわりのイナバウアー
第10回「自分達が作ったSDGsカルタを広げよう」	第11回「先生方へのありがとう会を企画しよう」
第11回「先生方にありがとうの会を開こう」 +道徳科：内容項目「よりよい学校生活、集団生活の充実」 教材名 森の絵	第12回「6年2組ありがとう会をしよう」

以上の実践の中から、令和5年度特別版「駅伝記録会を開こう」、令和6年度第8回「学校の大掃除をしよう」を紹介する。

(1) 道徳科：内容項目「友情、信頼」＋特別版学級会：議題「駅伝記録会を開こう」

本校には、特設駅伝部が設立されており、毎年10月に本宮市内で開かれる駅伝大会に出場している。数週間前に、児童は道徳科で「本当の友情とは何か」を考えた。登場人物の間には、はたして本当の友情が成り立っているのかゆさぶりの発問をし、全体で話し合う中で、C2児が「私もC1さんが言ったように、本当の友情には『思い』と『行動』がセットになるんだと思います。だから二人には

本当の友情が成り立つと思います。」と他者への共感と、道徳的価値の理解を深める姿が見られた。道徳科を学習した数週間後、駅伝大会が雨天のために中止となった。すると、C1児とC2児が休み時間に担任に学級会の議題について相談しにきた。「**この前の道徳のことを話していて、私のクラスにも駅伝大会に出る友達がたくさんいるのに、中止になったのはかわいそうです。だから、帰りの会での連絡で、みんなに議題を提案したいです。**」と力強く話した。まさに必要感のある提案理由であった。

C3:明日の体育のときにやってあげようよ。

C4:チームはどうするの？

C5:チームを決めた対決じゃなくて、1本のタスキをみんなであつなぐリレーにしたら？

C6:いいね！それなら時間もかからないし、半周ずつ走れば、苦手な人もできるよね！

C7:アンカーは駅伝部にしようよ。

C8:せっかくだから壮行会で作った旗で応援して盛り上げよう。



写真1 帰りの会での話し合い

駅伝大会に出場予定だった児童は、「まさか、やれるとは思ってもしなかった。放課後、毎日練習していたから、みんなと走れたこともそうだし、みんなが考えてくれたのが嬉しかった。」と、その日の帰りの会で感想を述べた。すると、「**2組はできたけど、他の学年にも駅伝部がいるから、その子達もなんとか走らせたいよね。**」と、学級の枠を越えて「たい」「よう」が生まれた。実現させるために、児童は代表委員会に議題を提案し、見事、校内駅伝記録会を全校生で開催させることができた。



写真2 壮行会で作った旗で応援



写真3 体育科の時間で28人リレー



写真4 代表委員企画「駅伝記録会」

(2) 学級会：議題「学校の大掃除をしよう」＋道徳科：内容項目「家族愛、家庭生活の充実」

本校にはSSS（スクールサポートスタッフ）がおり、様々な業務を行いながら、私たちの手の届かない場所を清掃してくれる。本議題は家庭科「クリーン大作戦」と関連を図ったものであり、児童から「次の学級会でSSSのあずみさんと一緒に話し合って、普段できない場所を清掃したい。」と提案があった。学級会にSSSをゲストティーチャーとして招く話し合いは初めてであったが、児童はSSSの話真剣に聞き、限られた時間の中で自分達が清掃する場所を「排水口」に決めた。活動終了後、**児童の思いを言語化した振り返り**を実施した。すると児童からは「**家に帰った後、いつも掃除をしてくれるお母さんに感謝の思いを伝えようと思いました。」「今日学んだことを家でもやってみたいです。」**との声があがり、家でも自分達にできる掃除をしてみるようになった。



写真5 SSSからのお話

本校では第二学期の授業参観で、全校一斉道徳科の学習を公開している。本時は、これまで自分自身の成長を願い、愛情をもって育んでくれた家族に対して、尊敬や感謝を込めて、家族のために



写真6 校内の排水口掃除を実施

自分には何ができるかを考えた内容である。「自己の振り返り」の時間には、共通体験として先日の校内大掃除の様子や、家庭で清掃し終えた後の振り返りワークシートを提示し、これまでの自分自身を見つめた。

C9:今回、家で掃除をしてみたけど、私はなかなか自分にできることをしていないなと思いました。仕事から帰ってきて疲れているのに、いつも私達のために食事の準備やお掃除をしてくれるお母さんがすごいと思いました。

C10:僕は手伝いをしています。でもそれはお小遣いのためとか、親に言われて嫌々やっていることが多いなと思いました。

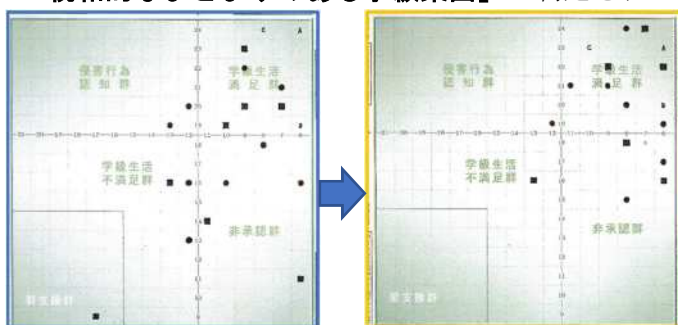


写真7 家族からの手紙に笑顔があふれる

この日のために、保護者の方々に小学校卒業を迎える我が子に書いてきていただいた手紙を渡してもらった。家族が自分に対してどのような思いや願いをもっているかを直接聞く機会は少ないのではないだろうか。まして、思春期を迎えている児童にとって、家族に対する自分の思いを表現することも少ないと考える。自己を見つめる振り返りの時間ではあるが、家族が相互に深い信頼関係で結ばれていることに気付かせたいと考え、設定した。家族から初めて手紙をもらう児童も多く、恥ずかしがる様子や、涙を浮かべる姿も見られた。学級会の実践は「よりよい学校生活、集団生活の充実」に大きく関連しているが、児童の「家庭にもつなげたい」という思いから、本内容項目へと関連させて実践した。児童と対話をする振り返りの時間は、児童と保護者の思いを深める時間となっていた。

(3) 児童の変容

自分のよさを言えるようになった児童が増え、「どのようにして自分のよさを見つけたか」質問すると、「友達に教えてもらった」と回答した児童が4名から16名へと増加した。さらに、「話し合って決めたことをみんなでできたとき、どのような気持ちになりますか(非認知能力)」と質問したところ、「友達のよさがわかる」と回答した児童が7名から12名へ増加した。これは、児童が学級会で話し合い、実践していく中で見つけた友達のよさを、振り返りの時間に伝え合っていたことが大きく関係していると考えられる。「やってよかった」「自分達ならできると信じ、やってきた」と回答した児童も2名ずつ増加した。hyper-QUからも児童の変容が見られた。グラフ1は第5学年の1回目に実施したものの、グラフ2は第6学年の2回目に実施した結果である。グラフ1は「かたさのある学級集団」と判定されたが、グラフ2(令和6年度11月)は「親和的なまとまりのある学級集団」と判定された。児童の主体性ある活動を見守ることを前提に、様々な活動の中で一人一人に役割を与え、実践し、言語化した振り返りを継続してきた2年間で、児童の変容として表れたのだと考える。多くの児童が自己有用感と学級への所属意識を高めることができたと言える。



グラフ1 令和5年度6月実施 hyper-QU

グラフ2 令和6年度11月実施

3 さらなる児童の成長を目指して

道徳科や特別活動の指導は即効性を求めてしまうと、教師の価値の押しつけや、教師の期待通りに行動する児童になってしまうなど、双方の学習効果を低くすることになりかねない。今後も内面的資質を養う道徳科、そして道徳的実践の場が期待される特別活動の両方の特質をしっかりと理解し、生かし、関連付ける指導を意識していきたい。